

氷の女社長は、年下の俺の前で だけ女になる ー小さな会社を二 人三脚で立て直す夜にー

誰にも弱音を吐けない小さな会社の女社長が、中途入社の
年下の前でだけ、肩の力を抜いて崩れていく純愛
夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

この業界の人間は、みんな桐谷冬美きりやふゆみのことを「氷の女社長」と呼ぶ。

社員五人しかいない小さな広告制作会社を、たった一人で背負っている人だ。大手代理店を相手にした競合プレゼンでも一步も引かず、徹夜明けでも背すじをまっすぐに伸ばし、どんなに追い込まれても、誰の前でも弱音を吐かない。数字に厳しく、妥協を許さず、けれど社員の生活だけは何があっても守り抜く。取引先からは恐れられ、同業からは一目置かれる、隙という隙のない経営者。困ったときは「桐谷さんに振れば間違いない」と、誰もが口を揃える、完璧な女社長。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

天井の灯りはとうに落として、枕もとの小さなスタンドの、オレンジ色の光だけが、慣れないマンションの寝室をぼんやりと照らしていた。日付の変わった、深い夜。ついさっき、大手を蹴散らして勝ち取った競合プレゼンの興奮も、もうこの部屋には残っていない。あるのは、二人ぶんの熱と、乱れた息づかいだけだ。

昼間の冬美を思い浮かべる。仕立ての良いダークグレーのスーツに身を包み、会議室の真ん中で大手の役員たちを正面から見据えていた人。誰よりも早く相手の弱点を見抜き、けれど決して声を荒らげず、静かな声で場の全部を握ってしまう。隙のない「桐谷社長」。誰もが恐れ、誰もが頼り、けれど誰ひとり、会社の重みを一人で背負い続けてきた彼女自身の疲れには、気づかない。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……^{けん}健くん」

きっちりと結い上げていたはずの黒髪は、いつのまにかほどけて、白い首筋に幾筋も乱れて貼りついていて。いつもは大手の役員さえ怯ませる切れ長の双眸が、今は潤んで、頼りなくこちらを見上げてくる。何百という契約書にサインを書いてきたその手が、今は俺の背に、すがるようにまわされていた。

薄明かりの下で、いつもまっすぐな背すじが、今は俺の腕のなかで頼りなくしなって、熱く火照っていた。汗ばんだ素肌が触れ合うたびに、昼間の隙のなさが、ひとつ、またひとつと、ほどけていく。耳もとで乱れる息づかいが、

俺の名前のかたちになりかけては、声にならずに溶けていった。

隙のない鎧を一枚ずつ脱いだあとの、何もまとっていないこの人を知っているのは、たぶん、世界で俺だけだ。

業界で「氷の女社長」しか知らない人間は、想像もしないだろう。あの桐谷冬美が、二人きりの夜に、こんなふう
に肩の力を抜いて崩れるなんて。会議室でいつも完璧に微笑んでいたあの人が、と。けれど今、この狭い部屋に満ちている熱を、知る者は誰もいない。それでいい、と健は思った。この夜は、二人だけのものだ。

それでも――俺だけが知っている。この人の、誰の前でも折れない顔と、俺の前でだけ見せる無防備な顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——